

6～7世紀の中国における国家構造と国家意識

稲住, 哲朗

<https://doi.org/10.15017/1500460>

出版情報：九州大学, 2014, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

論文題目

6～7世紀の中国における国家構造と国家意識

氏名 稲住 哲朗

論文内容の要旨

本論で筆者が考察範囲とするのは、6世紀から7世紀前半における中国の国家構造とそれを支えた人々の国家意識についてである。

当該期は、秦漢という巨大な統一帝国が解体し、五胡十六国の大分裂期、南北朝による南北対峙の分裂の時代から、再び隋唐の出現によって統一がもたらされる時期にあたる。本論では、この時代の実態を解明する鍵として、北魏の分裂後に山東地方を支配した北斉と、北斉を併呑した北周および、その後継である隋の国家構造とそこに仕えた人々の国家意識に注目するが、その理由の第一は、従来の研究では、北魏孝文帝期に胡漢融合が進められたことから一転して、北斉は民族対立が再燃した時代であったとされ、それをもとに個別の事例、人物についても論じられているが、その検討が「荒い」ものとなっているという点である。理由の第二は、また、隋・唐の直接的淵源として西魏・北周の体制、制度が積極的に評価される一方で、北斉は時代の敗北者としてその否定的側面に焦点が合わせられる傾向にあるからである。しかし、そうした北周を中心とした理解からでは、当時の国家構造を十分に理解することはできず、北魏から隋唐へと至る歴史的展開を十分に理解するためには、北斉史にも目を向ける必要がある。

本論では、理由の第一より、第一章および第二章において東魏・北斉の政権構造について考察を行った。第一章では北斉建国に際して、ときの権力者である高洋が、東魏の皇帝を廃し、皇帝位に即いて新王朝を創始することをめぐり、それに不満を持つ者と、それを推し進めようとする者との間の確執があり、その調整役という立場で、高洋の母である婁太后が存在していたことを論じた。さらに、皇帝即位を進める動きと、それを阻止しようとする動きが、これまで論じられてきたような胡族、漢族という民族を中心になされたのではなく、立場に応じて人々は様々な動きを示していたことを論じ、東魏・北斉前期の政権内部の実態について指摘した。

第二章では、北斉後期に宰相として政権を担った祖珽の動向について、第一章で追究した東魏・北斉政権の政権構造を踏まえて考察を行った。すなわち、従来の研究では、祖珽は漢人貴族の領袖的人物で、胡族と恩倖との間で宮廷闘争を繰りひろげた人物とされてきた。しかし、彼は漢人貴族としての立場を利用したというよりも、皇帝との個人的な恩寵を通して立身した側面を有しており、なおかつ胡族出身の人物とも交流を持っていたことを明らかにした。このことから、従来の研究では北斉は、北周が周礼的国制のもとに胡漢融合を図ったのとは対照的な状況にあったとされてきたが、その構造及び動態を出自や民族の違いによる集団間の対立からのみ把握することは、その

実態とは乖離することを指摘した。

以上、第一章および第二章での考察により、①胡漢の民族対立が再燃した国家、すなわち、北魏孝文帝以来の漢化政策とは一線を画するとする見方からは、北斉政権の構造を十分に明らかにすることができない点、②宮廷闘争を通じて権力をいかにして握り、自らが属する民族、集団に利益を還元するののかという政権を「私物化」したとする見方では等閑視されてきた、士人が「破家報国」「自らの国家」の意識を北斉政権に対して明確に有していた点、を明らかにした。

第三章および第四章では、上記理由の第二を受けて、北斉政権が崩壊した後に、北斉出身者が北周・隋・唐に取り込まれた中で、どのような意識を持っていたのか、そして、反対に王朝と支配者集団である関隴集団側は、どのような形で彼らを受容していったかという点について考察した。

第三章では、北斉滅亡後に北周に入った士人が、どのような意識を持って北周に仕えたのかについて、盧思道という漢族士人の動向と、その史論的著作である『周隋興亡論』を通して考察した。従来の研究では、関隴集団の分厚い牙城の前に、北斉出身者は亡国の遺臣として北周・隋の支配を甘受しながらも、政権とは一定の距離を有っていたとされてきた。しかし、盧思道の著作からは、彼が北斉時代を賛美しながらも、それをすでに過去のものとして冷静な分析を行っていること、隋の治世がもたらした太平の世に対する好意的な態度を読み解くことができることを指摘した。

第四章では、第三章で考察した、北周・隋に対する北斉出身者の国家意識を生み出すに至った要因として、北周・隋は関隴集団を中心とした政権構造ながらも、北斉出身者を受容する構造をも有していた点について考察を行った。その結果、関隴集団が支配者層の多数派を占める中でも、北斉出身者は、出身の差による抑圧を受けてはいなかったことを明らかにすることができた。

以上、第三章および第四章での考察内容からは、北斉と北周、山東と関隴の対立というとらえ方は、北周・隋に対する人々の国家意識と当該時代の国家構造を十全に読み解くことはできないことを明らかにした。

終章では、これまで考察してきた南北朝後期から隋に至る国家構造と国家意識が唐初にも引き継がれていたことを明らかにするため、『北斉書』の編纂とその内容から読み取れる唐の正統観の一端について考察した。その結果、唐代では北斉は正統な王朝と見なされてはいなかったが、『北斉書』が勅撰で編纂されたことや、北斉の正統性にも一定の配慮がなされた記述がなされていることを明らかにした。このことから、唐初でも、北斉の遺臣に対して一定の配慮がなされていたことが明らかとなり、それは、南北朝後期から隋に至る国家構造と国家意識が唐初にも引き継がれていたことを示している。